

英語母語話者の容認度判断とコーパス・データ

—— much と many の場合 ——

深 谷 輝 彦*

English Native Speakers' Acceptability Judgments and Corpus Data

—*Much and Many*—

Teruhiko FUKAYA

1. はじめに

どのような言語研究に取り組むにせよ、言語研究者はその対象言語について何らかの方法で集めた言語データを持ち、その容認度をもとに言語学的議論を展開する。それでは、その言語データはどのように収集されるのであろうか。この疑問に対する解答の一つとして Greenbaum (1988) が次の三種類の言語データ収集法をあげている。

- (1) a. コーパス
- b. 内省
- c. 抽出テスト

Greenbaum によれば、(1a) のコーパスは、その優位性として言語記述の基礎データを構成するという役割に加えて、頻度調査や変種特有の言語特徴解明にその強みを表す。その一方で、低頻度の言語事象については、その全体像がコーパスでどれだけとらえられるか、という問題点を指摘している。このようなコーパスの限界を補強し、さらなる言語データを提供してくれるのが (1b) の内省である。内省とは、言語学者が言語研究のために作成したデータを母語の言語直観に基づいてたとえば容認可能かどうか判断する作業を指す。しかしこのデータ収集について Greenbaum は次のような問題点があると言う。たとえば言語学者自身が判断すべきデータを見たときに、どのような言語学的問題か、理論的にどう判断されるべきか、等の余分な推論が入り込み、自然な容認度判断をできない可能性がある。そしてもっと困難な問題は、一人の言語学者の判断では、言語が本質的に備える地域的かつ社会言語的変種を反映できない点である。

そこで第三のデータとして言語調査協力者を使って行う (1c) の抽出テストの重要性を

* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

認識しなければならない。このテストでは、具体的には、「問題点を含んだ文や発話をこちらから見せたり聞かせたり、質問や話で誘導して問題とかかわりある文や発話を相手から引き出したり、ある文や発話に何らかの文法的な操作 (operation) を加えさせたり (例：肯定文→否定文、能動文→受動文)、いろいろと工夫されている。」(田中 (1988: 186) より引用) そしてこの種のテストについては、多様化が進んでいる。たとえば、藤村・滝沢 (2011) の第2部には、第二言語習得の研究手法として、発話プロトコル、反応時間、アイトラッキング、脳イメージング技術の活用が提案されている。

本論の目的は、久野・高見 (2007) が丁寧に拾い上げている英語の **much** と **many** に関する英語母語話者の内省データを英語大規模データで検証することである。久野・高見は日本人英語研究者という立場を生かしながら、**much** と **many** という数量詞についてしつこい程に英語話者の直観を追求している。本論では、久野・高見が引き出した **much** と **many** の行動パターンと複数のコーパスを照合することで、より豊かな言語データを発掘するという課題に取り組む。

2. 久野・高見 (2007) の内省観察結果と語法調査

以下では久野・高見 (2007) が **much/many** について英語母語話者から引き出している内省を整理すると同時に、語法研究書からの記述を追加することで、後のコーパス調査の論点を明白にしたい。

2.1 肯定文と **much**

much について久野・高見は次のような内省観察を行っている。

- (2) 「日常の話し言葉で、**much** は、否定文や疑問文でなら自然に用いられますが、肯定文では用いられません。」 (久野・高見 (2007: 76))

この内省は、次の **much** を含む肯定文、否定文、疑問文の容認度判断によって支持される。

- (3) a. *I drank **much** milk.
b. I didn't drink **much** milk.
c. Did you drink **much** milk?

上の引用 (2) で注目すべきは、「日常の話し言葉で」という伝達様式条件である。つまり日常の話し言葉以外では、(2) の条件が緩和されるという。久野・高見いわく、

- (4) 「**much** は……形式ばった表現や堅い書き言葉の表現では、肯定文でも用いられます。」 (久野・高見 (2007: 80))

そして We had **much** discussion and finally came to a conclusion. という例文をあげている。(4) の内省の妥当性は、Carter and McCarthy (2006: 372) の例 (5) から裏打ちされる。

- (5) There will be **much** competition among all those involved to hand out sweeping verdicts on history. The British will be credited (particularly by the British) with having done a splendid and disinterested job.

(5)に関連して肯定文の **much** が好まれるのは、competition, controversy, effort, discussion などの抽象名詞環境であると、Carter and McCarthy は付言する。同様の趣旨で、Collins COBUILD English Usage (2012: 337) も discussion, debate, attention のような抽象名詞を列挙している。この点は後のコーパス調査で確認すべき問題点の一つである。

くだけた文体で肯定文と many/much の相性を比較すると、**much** の方が特に悪いと、Swan (2005: 357) が指摘している。この点を踏まえながら、次のサブセクションの議論に進む。

2.2 肯定文と many

肯定文と many の関係については、久野・高見の結論からいうと、「many がくだけた話し言葉の肯定文で用いられないのは、**much** ほどはっきりしていない……」というともどいを見せている。彼らのとまどいは次の英語母語話者の内省のゆれに起因している。

- (6) 伝達様式と many を含む肯定文

書き言葉	話し言葉	
適格 e.g. The congressman has many friends among all social classes.	多少不自然ながら、 問題なし e.g. I have many friends in England.	かなり不自然 e.g. I have many friends in England.

話し言葉では肯定文であり many を用いない点は、**much** と共通している反面、話し言葉で I have many friends in England. という例文の容認度を調べると、判断が (6) のように不一致を起こします。改まり度が上がる書き言葉となると、**much** と同様に肯定文の many が許容される。

肯定文の many について、小西 (1989: 1107) は、米国では英国以上に肯定文の many の例がみられる、という観察をしている。もし久野・高見があたっている母語話者が米国人であれば、(6) の容認度判断のゆれも納得できる。また付随的に、many + 名詞句が副詞的な意味を表す場合によく肯定文で用いられる。(e.g. many times)

2.3 否定文・疑問文と much

久野・高見 (2007: 79) は、次のような表を掲載している。

- (7) 文の種類と much

	否定文	疑問文	肯定文
much	◎	○	×

この表 (7) は、否定文と疑問文を比べると、「much は否定文の方で多く用いられるようです。」というある母語話者の内省を表している。その話者によれば、

- (8) a. [◎] I don't have **much** money with me today.
- b. [○] I don't have **a lot of** money with me today.
- (9) a. [○] Did you have **much** money with you when you were robbed?
- b. [◎] Did you have **a lot of** money with you when were robbed?

という直観的差が much を含む否定文と疑問文であるという。

(9) のペアに関連して、Carter and McCarthy (2006: 372) は、疑問文で much/many が使われても、“a large quantity or number is involved” という言外の意味は伴わないが、他方、a lot of を使うと “the quantity or number may be large” という期待が込められるという。もしこの解説が正しいとすると、多額のお金を持参していたかどうか尋ねる (9b) が好まれるのも、もっともである。

2.4 肯定文主語位置の much/many

久野・高見は、many が主語位置に表れると、肯定文でも容認度が高くなるという。

- (10) a. Many students came to the party last night.
- b. Many people attended the ceremony. (久野・高見 (2007: 86))

同様に much についても、肯定文の主語の位置で生起する可能性が高い、と Carter and McCarthy (2006: 372) は言う。

- (11) a. **Much** has been written on this topic.
(~~They have written much on this topic.~~)
- b. **Much** time has already been devoted to this discussion.

久野・高見は、なぜ (10) のような主語位置が many にとって好ましいのか、は今のところ不明だという。2.1 で述べたように、(11) では二文ともに受動態をとっているせいで、改まり度が上がり、より堅苦しい文になっている点も思い出しておきたい。

2.5 まとめ

このセクションのまとめとして、コーパスで調査する問題点を整理する。

- (12) much を肯定文で使うとき、改まり度の違いで説明できるかどうか。
- (13) 肯定文で much に後続するのは、competition, controversy, effort, discussion などの抽象名詞であるかどうか。
- (14) much に比べて many は肯定文の使用頻度が高いかどうか。
- (15) much は疑問文よりも否定文での使用頻度が高いかどうか。

(16) much/many が肯定文に実現するとき、主語位置が好まれるかどうか。

このリストをみると、肯定文に起こる much/many が中心的トピックであることが、明らかであろう。例外的な文でありながら、内省だけではどうも実態が十分に把握されていない。特に (13) のような語彙の特徴はもっと解明される必要がある。次のセクションでは、様々なコーパスを駆使しながら、much/many + 名詞という連鎖を収集した上で、(12) から (16) の疑問点に答える。

3. コーパス調査

個別の問題に取り組む前に、many, much, a lot of が会話 (CON), フィクション (FIC), 新聞記事 (NEWS), 学術記事 (ACAD) という四レジスターでどのくらいの頻度で生起するのか、Biber et al. (1999: 278) からレジスター別頻度表を引用する。

(17) レジスター別数量詞頻度

	CON	FIC	NEWS	ACAD
many	■ ■	■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■
much	■ ■ ■	■ ■	■	■
a lot of	■ ■	■	■	□

■ represents 200 □ represents less than 100

Biber et al. は表 (17) について、二つの観察を添えている。第一に a lot of の低頻度については、この数量詞自体が19世紀前半に生まれた表現であるのに対し、much/many は古英語までその起源をたどれる語である、とい語誌に言及している。もう一点は、学術記事に多用される many に注目しよう。会話やフィクションに比べて学術記事は正確さや厳密さが求められる。そのため、学術記事の筆者が一般化を述べる際に慎重を期すために、many を盛んに使っていると判定している。

コーパス調査について触れておく。本論で扱うのは、much/many + 名詞のパターンである。したがって much の副詞用法や、so/very/too/this/that/as/how/not + much/many の連鎖、名詞が省略された場合、much + 比較級は考察対象からはずす。しかしはずすからと言って、これらのフレーズが例外的という意味ではない。単純に頻度だけでいえば、much/many + 名詞という名詞句よりも、so 以下の強調詞 + much/many という用法の方が、はるかに頻出する。つまり、(17) にみるように文の種類や後続する名詞の種類に惑わされない a lot of よりも much/many の方が高頻度であるのは、much を副詞的に使ったり、強調詞を伴ったりしながら、数量の多さに気持ちを込めているからである。そして so/very/too/this/that/many という強調詞がくると、a lot of と選択肢はなくなり、much/many の独壇場となる点も注目しておきたい。

以下のデータ取得方法を説明する。本論で使う much/many を、WordbanksOnline (<http://wordbanks.jkn21.com/>) の二種類のサブコーパスすなわち改まり度が低い ukspoken (7,918,719語) と改まり度が高い times2 (15,233,491語) から検索し、そこから3000例を

無作為に抽出したコーパスデータを得る。その3000例のうちから、much/many + 名詞という自動抽出したデータを目視で確認した上で、基礎データとする。

3.1 改まり度と much

このセクションでは、(12)の「much を肯定文で使うとき、改まり度の違いで説明できるかどうか。」という問いに答える。本調査で言い換えると、ukspoken よりも times2 のほうが改まり度が高いので、後者のコーパスでより多くの much + 名詞が実現していると予測される。特に ukspoken という略語は、UK transcribed informal speech を表している。このうちの informal speech という部分に留意すると、ukspoken で much + 名詞を含む肯定文は少なく、英国高級紙の代表である times2 には much を含む名詞句が多いという結果が得れば、久野・高見が引用した英語話者の直感は支持される。そこで、(18)では much 名詞句が生じる文の種類ごとの頻度をコーパス別にあげる。

(18) much + 名詞と文の種類の相関

	否定文	疑問文	肯定文	合計
ukspoken	72 (73%)	20 (20%)	5 (7%)	99
times2	68 (49%)	3 (2%)	67 (49%)	138

(18)の数値をみると、久野・高見が調査した母語話者の直観にしたがい、informal speech では肯定文中に much 名詞句は1割にも達しない。他方、times2 という改まり度が高い新聞英語では肯定文での much 名詞句は約5割を占める。

さらに ukspoken の5例で、much 名詞句の役割を調べると動詞の目的語が3例、there 構文の真主語1例、1例は不明という結果が得られる。同様の調査を times2 の67例に適用すると、目的語が29例、前置詞句が16例、there 構文の真主語が14例、主語が6例、補語が2例という区分けが得られる。times2 からそれぞれの該当例を引用する。

- (19) a. He caused **much amusement** in his acceptance speech ... [目的語]
 b. **After much deliberation**, O'Neill decided that ... [前置詞句]
 c. There has been **much ado** about Mr S's forced resignation. [there 構文]
 d. **Much parliamentary time** was spent emphasising precisely that ... [主語]
 e. it's not always **much fun** travelling alone. [補語]

以上のように、times2 の much + 名詞は肯定文で、文の可能な限りすべての位置に生起しているのに対し、ukspoken では(19a)と(19c)の位置に much 名詞句は限定されている。

much の肯定文はより改まり度が高いテキスト、本論では times2 という新聞英語に実現する可能性が高い、という英語母語話者の判断はコーパスにより裏打ちされたと言える。次のサブセクションでは、肯定文の much に後続する名詞に注目する。

(18)の特徴として疑問文の割合について一言触れておきたい。informal speech の特徴といえば、話し手と聞き手の交替から生じる interactivenss, 話し手と聞き手が共有する場面、話し手と聞き手の間のコミュニケーションの三点を指摘できる。この特徴を文の種類

と結びつけるとき、話し言葉にとって疑問文の重要性は明白である。話し手が聞き手に尋ね聞き手が答えれば、まさに *interactive* という性格が成り立つ。疑問文をやりとりすることで場面の共有度が上昇し、コミュニケーションにつながる。対照的に新聞英語では書き手は、読者への情報提供とその評価に主眼を置いており、そこに *interactiveness* を求めることはない。したがって疑問文を使う動機付けが薄いと言わざるを無い。

3.2 much に続く名詞の種類

この小節は、肯定文にみられる *much* 名詞句の主要語である名詞に着目する。コーパスに基づく Carter and McCarthy (2006) や Collins COBUILD ENGLISH USAGE によれば、問題の名詞は抽象名詞である、という。そこで (18) の肯定文に現れる *much* 名詞句中の名詞をリストすることにする。

(20) much に後続する名詞一覧

ukspoken	times2	
attention	acclaim	expenditure
awareness	ado	fanfare
evidence	affection	fervour
stimulation	aid	food (for thought)
time	amusement	fun (3)
	art	glory
	attention	gusto
	banter	intelligence
	choice	interest
	clambering and peering	laughter
	comment (2)	(throw much) light
	compassion	nudity
	confidence	publicity
	confusion	reluctance
	consolation	praise (2)
	consternation	research
	controversy (2)	satisfaction
	damage	shouting
	debate (2)	smoking
	deliberation (2)	speculation
	design	support
	discussion	talk (2)
	dispute	tension
	effect	time (4)
	emotion	thought or imagination
	encouragement	vulgarity
	excitement	work

すべての名詞を括ると抽象名詞という枠になるだろう。同時に以下のようなおおざっぱな括りをかけることで、行為、話し合い、感情や思考とまとまりが見えてくる。

doing: laughter, shouting, smoking, clambering and peering, support, fanfare

talk: banter, comment, controversy, debate, discussion, dispute

emotion: affection amusement, compassion, confidence, confusion, encouragement, excitement, fervour, fun, reluctance, praise, satisfaction, tension,

thought: attention, deliberation, interest, speculation, intelligence

もう一点注目すべきは、特定の単語への偏りが見られないことである。time が 4 例、fun の 3 例がやっとで、後はすべて 1, 2 例と語彙の多様性が際立つ。これは、informal speech ならば奨励される語彙の繰り返しを意図的に避けながら、同意語の中からより場面にふさわしい語を新聞記者が選んでいるからであろうと推測できる。そしてこのような抽象度の高い語群が times2 の高い改まり度に貢献していることは、刮目に値する。

3.3 many + 名詞と文の種類

much 名詞句と比較して many 名詞句は文の種類という基準でどのような分布を示すのだろうか。表 (18) に対応する many 名詞句版を作成することにする。

(21) many + 名詞と文の種類の相関

	否定文	疑問文	肯定文	合計
ukspoken	133 (20%)	63 (10%)	458 (70%)	658
times2	98 (8%)	6 (0.5%)	1180 (91.5%)	1284

much + 名詞が改まり度に影響された結果、informal な会話には much + 名詞がわずか 5 例しかなく、formal な times2 でも 67 例を数えるのみであった。ところが many + 名詞の頻度 (21) になると、そのような改まり度に関係なく肯定文が文の種類中で最大の頻度で生じている。

そしてこれだけの many 名詞句が観察されるとその中には繰り返し起こっているフレーズのパターンも見える。試しに times2 の many 句からフレーズを探す作業を試みる。まず many を含む 2 語の連鎖を調べると

(22) in many, for many, many years, that many, of many, many people

という 6 つの句が 50 回以上の頻度を記録している。さらに many を含む 3 語連鎖にコーパス調査を広げると前置詞 + many 名詞句が多く発見できる。

(23) for many years (51), in many ways (30), in many cases (20), many years ago (8), in many parts (8), in many areas (5), in many countries (4),

さらにこれらの前置詞句は「肯定文で many をあまり用いない」という制約を受けないばかりか、a lot of による書き換えも許さない。times2 コーパスで (23) の many を a lot of に

差し替えた上で頻度を調べる。

- (24) for a lot of years (0), in a lot of ways (0), in a lot of cases (4), a lot of years ago (0),
in a lot of parts (0), in many areas (0), in a lot of countries (0)

(0) という表記が示しているように、in a lot of cases の 4 例以外は、全く書き換えがきかない。つまり (23) の前置詞句は many 専用のフレーズであり、肯定文制約も受けず、(21) の肯定文高頻度に一役買っていると言える。

3.4 much の否定文指向

ここでコーパス・データ (18) を再録する。このうち、「否定文、疑問文では much を、肯定文では a lot of を使う」という制約を守っているのは、ukspoken である。その ukspoken で否定文と疑問文の頻度を数えると、確かに否定文が多い。したがって英語話者は much を含む疑問文よりも否定文に多く接しているので、直観的に否定文と much の相性の良さを感じているのかもしれない。

(18) much + 名詞と文の種類の相関

	否定文	疑問文	肯定文	合計
ukspoken	72 (73%)	20 (20%)	5 (7%)	99
times2	68 (49%)	3 (2%)	67 (49%)	138

但し他のコーパス・データすべてにおいて疑問文よりも否定文が多いので、much/many と否定文のつながりの問題といえるかどうか、今後さらに調査が必要であろう。また、コーパスから得られる頻度情報と (7) のような直観をリンクさせることができるかどうか、という問いは常に問う必要があるだろう。もっと心理言語学的な裏づけも必要であろう。

3.5 主語位置の much/may

この問いについては、(19) の直前で、次のような数値を述べた。

(25) 肯定文でみる much + 名詞の機能：ukspoken の場合

目的語	前置詞句	there 構文	主語	補語
3	0	1	1	0

(26) 肯定文でみる much + 名詞の機能：times2 の場合

目的語	前置詞句	there 構文	主語	補語
29	16	14	6	2

確かに “Much praise have been lavished on voluntary organisations ...” のような例をみると、主語の位置に注目するのは理解できるものの、(26) をみるかぎり、much 名詞句の主語が特別に肯定文を促進しているとは言えない。

それでは many 名詞句はどうであろうか。many 名詞句が肯定文として使われている例を ukspoken と times2 から採取する。そしてその例を文中での機能で分類すると

(27) 肯定文でみる many + 名詞の機能：ukspoken の場合

目的語	前置詞句	there 構文	主語	補語
55	177	66	87	2

(28) 肯定文でみる many + 名詞の機能：times2 の場合

目的語	前置詞句	there 構文	主語	補語
180	482	63	442	2

(27) で主語の位置に起こる many 名詞句が 5 つの機能のうち、第 2 位になり、times2 でもさらに主語の頻度が増し、肯定文中で第 2 位となっている。この時に初めて many が肯定文で実現するとき、主語の位置を好むという一般化が正当だといえる。

4. ま と め

本論では、久野・高見が much/many の語法について英語母語話者から聞き取った言語直観を英語コーパスで検証する作業に取り組んだ。その結果、

- (12) much を肯定文で使うとき、改まり度の違いで説明できる。
- (13) 肯定文で much に後続するのは、competition, controversy, effort, discussion などの抽象名詞である。ただし特定の抽象名詞に集中せず、幅広い抽象名詞が much と共起している。
- (14) much に比べて many は肯定文の使用頻度が高い。特に many を含む前置詞句が目立つ。
- (15) much は疑問文よりも否定文での使用頻度が確かに高い。しかし久野・高見が見いだした英語直観の証拠としてコーパス頻度が使えるかどうかは、さらに検討が必要である。
- (16) much/many が肯定文に実現するとき、主語位置が好まれるのは
times2 many > ukspoken many > times2 much > ukspoken much
と段階がみられる。左に寄ればその分だけ主語位置が肯定文での much/many 名詞句の成立を援助する。

今後期待されるアプローチの一つは、英語変種を利用した much/many の研究である。先行研究で「米国では英国以上に肯定文の many の例がみられる」という指摘がすでになされている。追加すべき変種としてカナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語も含めて英語変種間で much/many の共通する用法、ずれがある用法を調査する価値がある。

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. (2006) *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤村逸子・滝沢直宏（編）（2011）『言語研究の技法』ひつじ書房
- Greenbaum, Sidney. (1988) *Good English and the Grammarian*. London: Longman.
- 小西友七（1989）『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社
- 久野暲・高見健一（2007）『謎解きの英文法：否定』くろしお出版
- Swan, Michael. (2005) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 田中春美（編）（1988）『現代言語学辞典』成美堂
- Wild, Kate (ed.) (2012) *Collins COBUILD English Usage*. Glasgow: HarperCollins.